

---

---

所 属 : 国際学部

職・氏名 : 准教授 柿木 伸之

研究キーワード : 言語、歴史、他者、芸術、美、共生、ポストコロニアリズム

---

---

#### ■研究テーマ

##### ①テーマ：他者と応え合う言語の哲学的探究

概要：ここ 10 年ほど、20 世紀の前半に批評家などとしても活躍した思想家ヴァルター・ベンヤミンの思想の研究に取り組み、その成果を『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』（平凡社、2014 年）にまとめました。この拙著で論じたベンヤミンの言語哲学は、言葉を発することを、他者とのあいだに生きる息遣いとして捉えながら、言語を、文学などに端的に表われる創造性において、また他者の言葉の翻訳をつうじて不断に自己を創造する姿において浮かび上がらせています。このようなベンヤミンの言語への洞察を、現代世界における他者との共生や言語的表現の可能性へ向けて深化させることが、当面の課題です。

##### ②テーマ：他者に関かれた記憶と歴史の哲学的探究

概要：過去を記憶し、歴史を捉えること自体について再考を迫るような出来事とその証言が突きつけられている一方、それを否認するかたちで、神話化された歴史が虚構のアイデンティティを保証するものとして新たに顕揚され、歴史がファシズムを後押しした過去を反復しようとしている状況を踏まえながら、かつてあったことを記憶するとは、またその記憶を歴史として語り継ぐとはどういうことかを哲学的に探究します。それをつうじて、新たな、他者に関かれた記憶と歴史のありようを、芸術的実践の可能性も視野に入れながら模索します。その現時点での成果は、拙著『パット剥ギトッテシマッタ後の世界へ——ヒロシマを想起する思考』（インパクト出版会、2015 年）にまとめられておりますので、ご参照いただければ幸いです。

#### ■研究テーマの応用例

上記の研究にもとづいて、「ヒロシマ」の記憶を世界的なものとして語り継ごうとする文化的ないし芸術的実践などに、その意味を再考する何らかの手がかりを提供することは可能です。また、以前にドイツの哲学者テオドル・W・アドルノの『自律への教育』（中央公論新社、2011 年）という本の翻訳も共訳で上梓しましたが、これはナチス・ドイツの過去の過ちを繰り返すことのない社会をみずから築いていく将来の世代を育成するために、教育はどうあるべきかといった問題を論じた講演や対談を収めたものです。自律的かつ批判的な思考の涵養を、過去の克服の課題として説く本書は、日本の教育関係者もぜひ一読すべきものと考えられます。本書をベースに、平和教育のあり方などについて現場の関係者と議論深めるのにも応じていきたいと思えます。

#### ■想定される連携先

- ・ 文化的、芸術的活動に取り組む市民グループ（NGO・NPO）
- ・ 教育研究機関
- ・ 地方自治体の文化担当部局ならびにその文化関係の外郭団体